

「頑張る学校応援プラン」

～ふくしまの挑戦と戦略～

平成29年度 授業改善グランドデザイン

全国学力・学習状況調査の結果分析と学力向上の方策

- 1 全国学力・学習状況調査の結果の概要 P1
- 2 全国学力・学習状況調査の結果に見るふくしまの強みと課題 P2
- 3 国語科、算数・数学科の分析 P4
- 4 児童生徒質問紙調査、学校質問紙調査の結果概要 P8
- 5 ふくしまの「授業スタンダード」を活用した授業の充実 P10
- 6 教員相互の学び合いが生まれる学校の実践事例 P12
- 7 ふくしまの強みを生かし、課題の克服を目指して！ P14



平成29年8月
福島県教育庁義務教育課



©すべてのデータを、福島県教育庁義務教育課WEBサイトからPDFでダウンロードいただけます。

<http://www.gimu.fks.ed.jp/> または

福島県教育庁義務教育課

← 検索

1 全国学力・学習状況調査の結果の概要

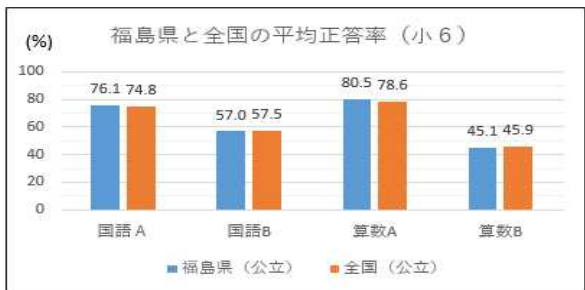
調査に関する概要

| | | |
|------|-------------------|-------------------|
| 実施日 | 平成29年4月18日(火) | |
| 実施校数 | 小学校 437校(15,101人) | 中学校 221校(16,157人) |
| 調査学年 | 小学校6年生 | 中学校3年生 |
| 調査教科 | 小学校 国語、算数 | 中学校 国語、数学 |

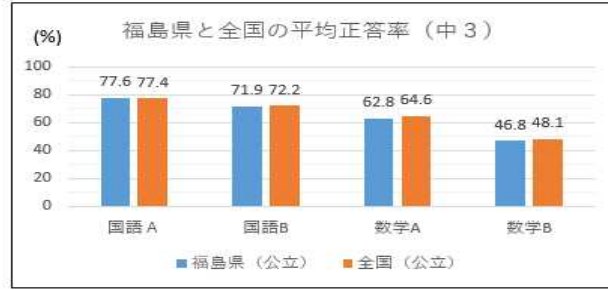
※ 特別支援学校（小学部）及び特別支援学校（中学部）を含む。

校種・教科に関する調査結果の概要

| 小学校6年生 | 国語A | 国語B | 算数A | 算数B |
|---------|------|------|------|------|
| 福島県（公立） | 76.1 | 57.0 | 80.5 | 45.1 |
| 全国（公立） | 74.8 | 57.5 | 78.6 | 45.9 |



| 中学校3年生 | 国語A | 国語B | 数学A | 数学B |
|---------|------|------|------|------|
| 福島県（公立） | 77.6 | 71.9 | 62.8 | 46.8 |
| 全国（公立） | 77.4 | 72.2 | 64.6 | 48.1 |



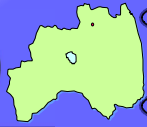
A: 主として「知識」に関する問題 B: 主として「活用」に関する問題

調査結果の総括(公立)

- 本年度調査結果について、本県（公立）の平均正答率を、校種・教科・問題種類別に全国平均正答率を基準として見た。小学校国語A、算数Aはやや上回り、小学校国語B、算数B、中学校国語A、Bはおおむね同じ、中学校数学A、Bはやや下回った。中学校数学と活用問題が、本県の課題である。
 - 今後、児童生徒一人一人の学習意欲と学力の更なる向上を目指し、「ふくしまの『授業スタンダード』」にもとづく授業の質的改善を図ることが重要である。特に、本県の課題である、いわゆる活用力の育成に向けて、児童生徒が主体的に学び、自分の考えなどを学級の友達と対話しながら吟味・検討して練り上げ、広げ深める学びに力を入れていくことが大切である。
- ※ 各学校においては、校長の確かなリーダーシップのもと、自校の結果及び児童生徒一人一人の解答状況や学力の実態を多面的に分析し、きめ細かな指導や支援を行っていく必要がある。そして、教員相互の学び合いをもとに、組織を生かして根気強く取り組んでいくことが大切である。

2 全国学力・学習状況調査の結果に見るふくしまの強みと課題

ふくしまの強み (よさ)



本県児童生徒の学力は改善傾向であり、学習習慣についても、小・中学校ともに全国より望ましい状況です。



国語A、B、算数・数学A、Bのすべてにおいて改善傾向

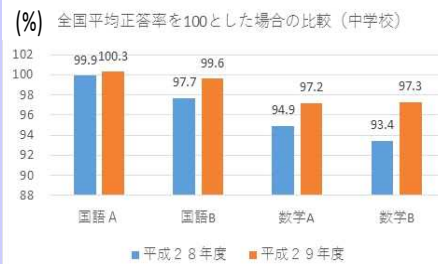
【小学校】

| 小学校 | 国語A | 国語B | 算数A | 算数B |
|--------|-------|------|-------|------|
| 平成28年度 | 100.5 | 97.9 | 99.5 | 97.9 |
| 平成29年度 | 101.7 | 99.1 | 102.4 | 98.3 |



【中学校】

| 中学校 | 国語A | 国語B | 数学A | 数学B |
|--------|-------|------|------|------|
| 平成28年度 | 99.9 | 97.7 | 94.9 | 93.4 |
| 平成29年度 | 100.3 | 99.6 | 97.2 | 97.3 |



全国平均正答率を100として昨年度と比較すると、
 小学校国語Aが+1.2ポイント
 小学校国語Bが+1.2ポイント
 小学校算数Aが+2.9ポイント
 小学校算数Bが+0.4ポイント
 中学校国語Aが+0.4ポイント
 中学校国語Bが+1.9ポイント
 中学校数学Aが+2.3ポイント
 中学校数学Bが+3.9ポイント
 となっており、すべての科目において改善傾向にある。

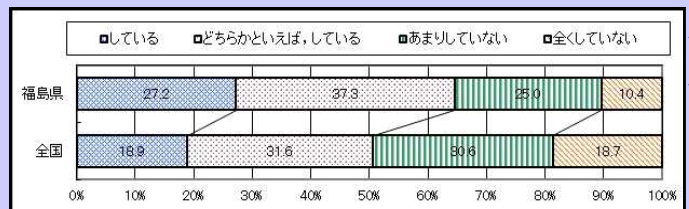
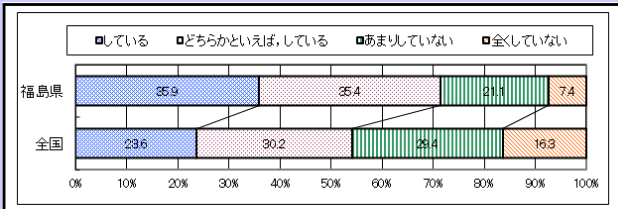


予習・復習に取り組む児童生徒の割合が高く、学習習慣が身に付いている

【小学校】

家で、学校の授業の復習をしている

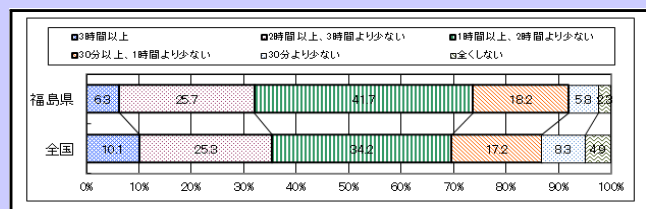
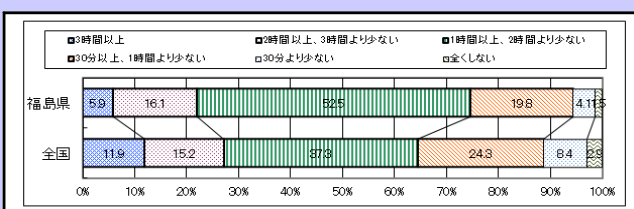
【中学校】



【小学校】

学校の授業以外に、普段、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか

【中学校】

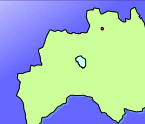


家で、学校の授業の予習をしている児童生徒の割合は、小学校48.4%（全国比+7.4ポイント）、中学校35.2%（全国比+3.5ポイント）で、また、復習をしている児童生徒の割合は、小学校71.3%（全国比+17.5ポイント）、中学校64.5%（全国比+14.0ポイント）と高く、予習・復習に取り組んでいる児童生徒が多い。

平日1時間以上勉強している児童生徒の割合は、小学校74.5%（全国比+10.1ポイント）、中学校73.7%（全国比+4.1ポイント）で、30分より少ない児童生徒の割合も、小学校5.6%（全国比-5.7ポイント）、中学校8.1%（全国比-5.1ポイント）と低く、学習習慣が身に付いている。

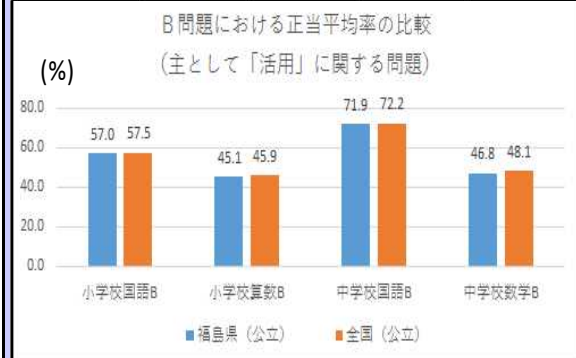
改善傾向は見られるものの、国語、算数・数学ともに「活用」に関する問題に課題が見られます。

ふくしまの課題



知識・技能を活用する問題が苦手

| | 小学校国語B | 小学校算数B | 中学校国語B | 中学校数学B |
|---------|--------|--------|--------|--------|
| 福島県(公立) | 57.0 | 45.1 | 71.9 | 46.8 |
| 全国(公立) | 57.5 | 45.9 | 72.2 | 48.1 |



主として「活用」に関する問題の平均正答率は、小学校国語Bが57.0%（全国比-0.5ポイント）小学校算数Bが45.1%（全国比-0.8ポイント）中学校国語Bが71.9%（全国比-0.3ポイント）中学校数学Bが46.8%（全国比-1.3ポイント）であり、改善傾向は見られるものの全国平均を下回っており、特に中学校数学が課題となっている。

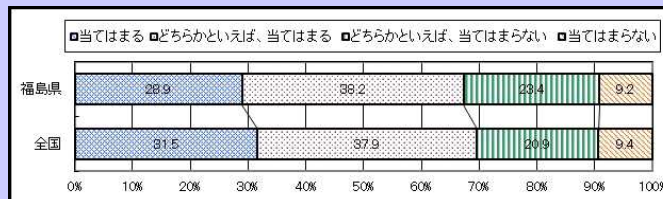
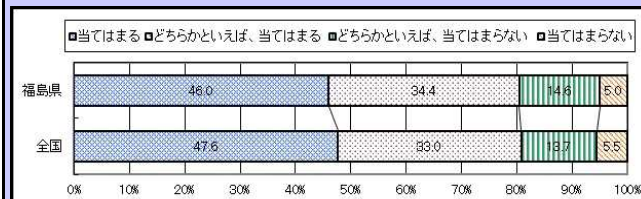


算数・数学の授業内容がよく分かっていない

【小学校】

算数(数学)の授業の内容はよく分かる

【中学校】



「算数・数学の授業の内容はよく分かる」について、肯定的な回答をした児童生徒の割合は、小学校で80.4%（全国比-0.2ポイント）、中学校で67.1%（全国比-2.3ポイント）である。小学校では児童の約5分の1、中学校では生徒の約3分の1が、算数・数学の授業内容がよく分かっていない。

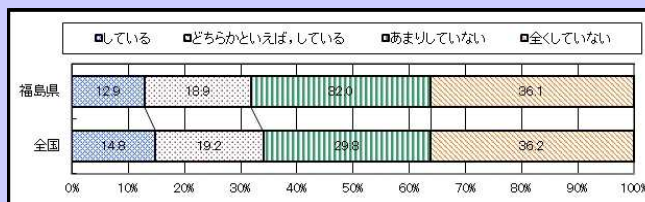
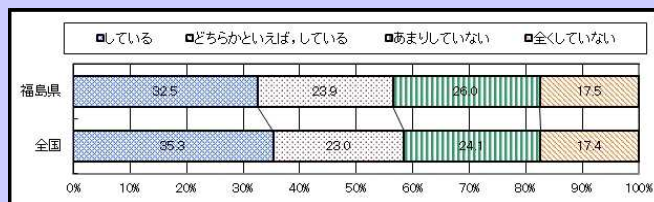


テレビやゲームの時間などのルールを家の人と決めていない

【小学校】

テレビを見る時間やゲームをする時間などのルールを家の人と決めていますか

【中学校】



「テレビを見る時間やゲームをする時間などのルールを家の人と決めていますか」について、肯定的な回答をした児童生徒の割合は、小学校で56.4%（全国比-1.9ポイント）、中学校で31.8%（全国比-2.2ポイント）で全国平均を下回っている。平成19年度調査と比較すると、小学校は8.3ポイント、中学校は8.9ポイント増加しており、改善傾向が見られる。

3 国語科、算数・数学科の分析

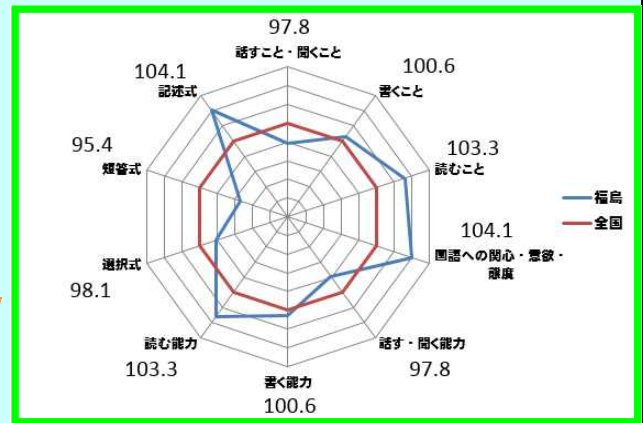
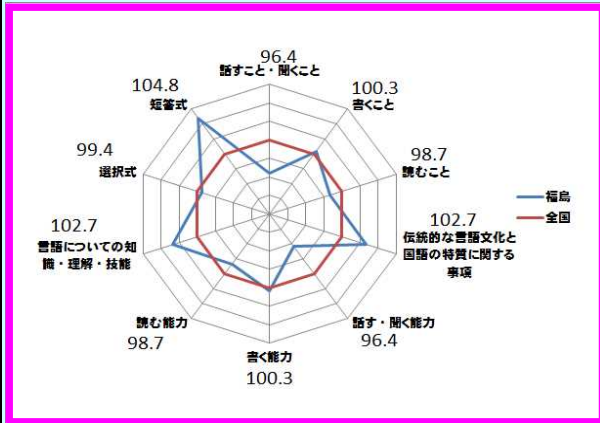
小学校国語

※ レーダーチャートでは、全国の平均正答率を100とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

国語A

領域・観点・問題形式別の状況

国語B



傾向と課題

- 国語Aは全国平均を上回り、国語Bは全国平均と同程度である。
- 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」については、今年度も全国平均を上回っている。
- 「話すこと・聞くこと」領域については、国語A、国語Bともに全国平均を下回っている。
- 「記述式」の問題は全国平均を上回り、無回答率も全国平均を下回っている。「選択式」「短答式」の問題形式は全国平均を下回っている。

課題が見られた設問

- A1 「学級文集のタイトルを決める」
 A2 「お礼の手紙を書く」
 A3 「必要な情報を見付けて読む」

- B1 「スピーチの練習をする」
 B2 「協力を依頼する文章を書く」
 B3 「物語を読んで、感想を伝え合う」

力を入りたい学習

- 互いの話を聞き、考えの共通点を整理しながら進行に沿って話し合うこと
- 目的や意図に応じ、内容の中心を明確にして書くこと
- 目的に応じて、中心となる語や文、段落を選び文章の中から必要な情報を見付けて読むこと

- 話の構成を工夫したり、聞き手の反応を見て話したりすることができるなどのスピーチメモのよさを捉えること
- 目的や意図に応じて、文章全体の構成を考えて文章を書くこと
- 考えを広げたり深めたりするための発言の意図を捉えること

改善のポイント

- 児童一人一人が司会や提案者等の役割について、経験を通して学ぶ機会の設定及び互いの考えの共通点や相違点を整理する学習指導の実施
- 依頼状や案内状など実用的な文章を書く学習活動の設定
- 「何のために調べるのか」(目的)「何について調べるのか」(事柄)等を明確にし、必要な情報を見つけて読む学習活動の設定

- スピーチメモを基にスピーチすることのよさを実感できる学習活動の設定
- 自分の考えを明確に伝えるために、目的や意図に応じて文章全体の構成を工夫する必要性のある文章を書く活動の設定
- 解釈や感想を交流する際、根拠となる文はどこかを質問したり、相手の考えを聞いた上で自分の理解が正しいかどうかを確かめる質問をしたりする指導の実施

小学校算数

※ レーダーチャートでは、全国の平均正答率を100とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

領域・観点・問題形式別の状況

算数A



算数B



傾向と課題

- 算数Aは、すべての領域で全国平均を上回っている。
- 算数Bは、すべての領域で全国平均を下回っているが、昨年に引き続き改善傾向が見られる。
- 「数と計算」領域で、特に平均正答率が高くなってきている。(算数B「図形」領域については、記述式)
- 「記述式」の問題での平均正答率が低い。一方で、「記述式」における無回答率は、全国平均を下回っている。

課題が見られた設問

- A1(3) 「 60×0.4 を、 60×4 を基にして考えるときの正しい積の求め方を選ぶ」
 A4 「重さ、長さについて任意単位による測定を基に比較しているものを選ぶ」

- B2(2) 「13本の直線を使う場合、手紙の用紙の長い辺を3等分するのは、何本目の直線と交わった点かを書く」
 B3(1) 「飛び離れた数値を除いた場合の平均を求める式を選ぶ」
 B3(2) 「仮の平均の考えを活用して、測定値の平均を求める」

力を入れたい学習

- 乗法の性質を用いて、小数の乗法の計算の仕方を考えることができるようにすること
- 直接比較、間接比較、任意単位による測定、普遍単位による測定などの、比較や測定の方法とそれぞれのよさを理解すること

- 日常生活の事象を数理的に捉え、算数の有用性を実感できるようにすること
- 測定値の平均を求める式の意味を理解すること
- 場面や状況に応じて数理的な処理ができるようにすること

改善のポイント

- 乗法の性質を確認しながら、小数の乗法を整数の乗法に置き換える活動の設定
- 児童が、既習の比較や測定の方法を想起して、新たに学習する量の比較や測定に活用したり、異なる種類の量の比較や測定の方法について、共通点を見いだしたりする活動の設定

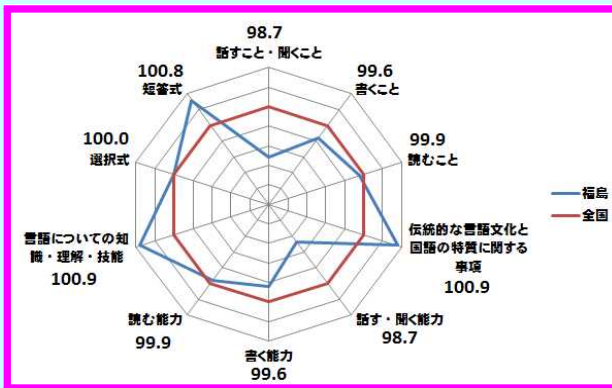
- 問題解決のために示された方法を解釈し、その方法を問題場面に応じて適用する活動の設定
- 測定値の平均を求める式と日常生活の場面を関連付けて解釈したり、平均を求める過程をグラフ等を用いて視覚的に捉えたりする機会の設定
- ある数値を除いて平均を求めた場合について、その数値を除いた理由を説明する活動の設定

中学校国語

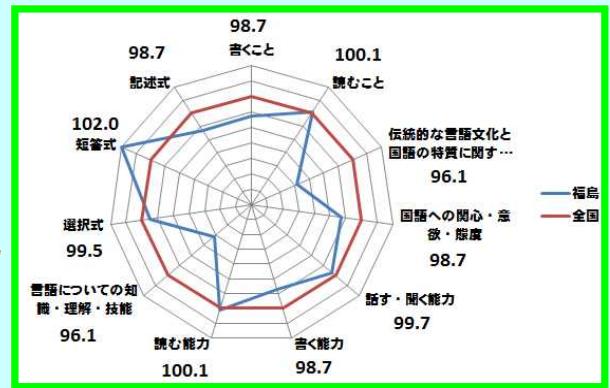
※ レーダーチャートでは、全国の平均正答率を100とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

領域・観点・問題形式別の状況

国語A



国語B



傾向と課題

- 国語A、国語Bともに全国平均をやや下回っているが、領域、評価観点、問題形式のそれぞれの平均正答率は、昨年に引き続き改善傾向が見られる。
- 国語Aは、「話すこと・聞くこと」領域において、全国平均を下回り、「書くこと」領域との関連が高い。
- 国語Bは、「読むこと」領域において全国平均を上回り、「書くこと」領域において、全国平均を下回っている。特に表現技法等に注目して自分の考えを書くことに課題が見られる。
- 「記述式」の問題での平均正答率は低いが、無回答率も全国平均より低い。

課題が見られた設問

- A 2 二 「スピーチの構成を説明したものとして適切なものを選択する」
A 7 二 「結論にたどり着いた理由として適切なものを選択する」

- B 1 三 「比喩を用いた表現に着目し、感じたことや考えたことを書く」
B 3 三 「アンケートをとる対象と質問内容、その質問についての回答を載せることで興味をもってもらえると考えた理由を書く」

力を入れたい学習

- 聞き手に自分の考えを伝えるために、資料を提示する必要があるかどうかを考え、効果的に活用して話すこと
- 事実と意見との関係に注意し、どのような事実を根拠として取り上げ、どのように配列するかなどについて考え、スピーチの構成を工夫すること

- 複数の資料から得た情報の中から何をどのように引用すればよいのかを判断したり、情報と情報の関連を考え、再構成して示したりすること
- 日常生活や社会生活の中から課題を決め、見通しをもって必要な情報を集め、自分の考えをまとめること

改善のポイント

- スピーチや話し合いでどのような資料を用いればよいのかを吟味したり、話し合いの様子を記録したものを基に振り返ったりする学習活動の設定
- スピーチを聞いてどこが事実でどこが意見なのかを考えて、その事実が意見の根拠として適切かどうかなどについて検討し、自分の表現に生かす学習活動の設定

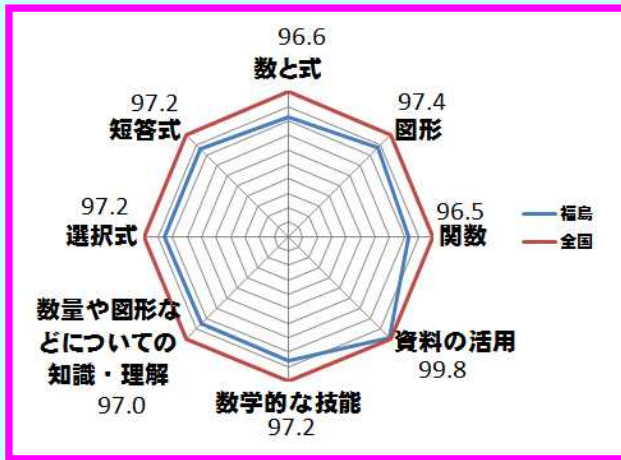
- 段落の役割などに注意して文章を構成したり、項目を立ててまとめたりする学習活動の設定
- パンフレットやリーフレット、雑誌、新聞を利用したり、関係する人々にインタビューやアンケートを行ったりする学習活動の設定

中学校数学

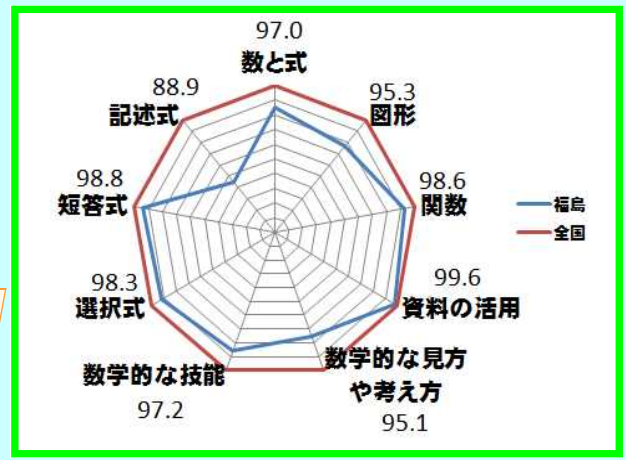
※ レーダーチャートでは、全国の平均正答率を100とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

領域・観点・問題形式別の状況

数学A



数学B



傾向と課題

- 数学A、数学Bともに全国平均を下回っているが、領域、評価観点、問題形式それぞれの平均正答率は、昨年度よりも全国平均との差が小さくなってきている。
- 領域別では、特に「資料の活用」領域の正答率が昨年度よりも高くなってきている。
- 数学Bでは、「数学的な見方や考え方」の観点と「記述式」の問題形式について全国平均を大きく下回っており、知識及び技能を活用する問題や図形の証明問題、数学的に表現する問題に課題が見られる。

課題が見られた設問

- A1(2) 「aとbが負の数のときに四則計算の結果が負の数になるものを選ぶ」
- A2(4) 「等式 $x + 4y = 1$ をxについて解く」
- A7(2) 「与えられた方法で作図された四角形が、いつでも平行四辺形になることの根拠となる事柄を選ぶ」
- A15(2) 「赤玉3個、白玉2個の中から玉を1個取り出すとき、その玉が赤玉である確率を求める」

- B4(1) 「2つの角の大きさが等しいことを、三角形の合同を利用して証明する」
- B4(2) 「 $\angle BAD$ と $\angle CBE$ が 20° のとき、 $\angle BEA$ の大きさを求める」
- B5(3) 「『420分未満より420分以上の女子の方が、合計点が高い傾向にある』と主張できる理由を、グラフの特徴を基に説明する」

力を入れたい学習

- 正の数と負の数の四則計算の意味を理解できるようにすること
- ある文字について解くことの意味を理解し、等式を変形することができるようにすること
- 平行四辺形になるための条件を具体的な場面で用いることができるようにすること
- 「同様に確からしい」ことの意味を理解し、確率を求めることができるようにすること

- 事柄が成り立つ理由を筋道を立てて考え、証明することができるようにすること
- ある条件の下で成り立つ性質や関係に着目し、図形を考察することができるようにすること
- 判断の理由を数学的な表現を用いて説明できるようにすること

改善のポイント

- 計算のきまりや等式の変形の過程に着目したり、誤りを見いだし正しく計算し直したりする場面の設定
- 平行四辺形の作図手順に用いられている条件や具体物に潜む平行四辺形になるための条件を指摘する活動の設定
- 「同様に確からしい」ことを前提とし、起こり得る場合の数を数え上げることによって、確率を求めること

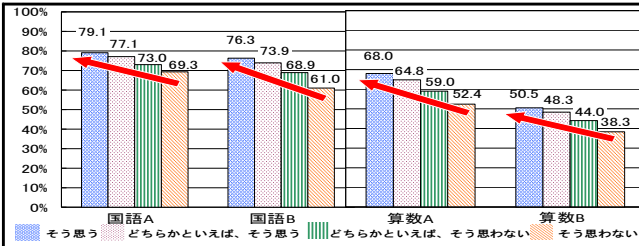
- 結論を導くには何が分かればよいかを明らかにしたり、与えられた条件を整理したり、着目すべき性質や関係を見いだしたりする活動の設定
- 与えられた条件から見いだせる図形の性質を明らかにしていく活動の設定
- 資料の分布の特徴を捉え、根拠を明確にして事柄が成り立つ理由を説明したり表現したりする活動の設定

4 児童生徒質問紙調査、学校質問紙調査の結果概要

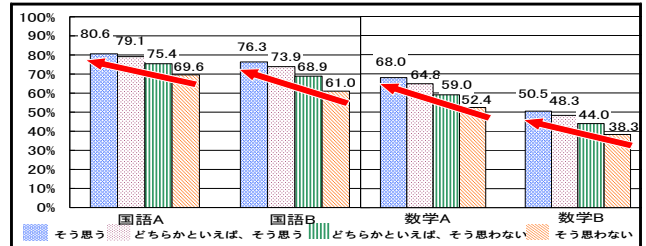
児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の現状

- 学級の友達と（生徒）の間で話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか 【児童生徒質問紙】

小学校 クロス集計(児童が回答した選択肢別正答率)

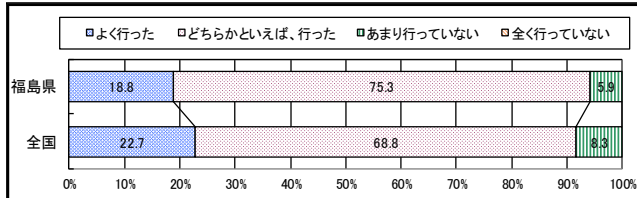


中学校 クロス集計(生徒が回答した選択肢別正答率)

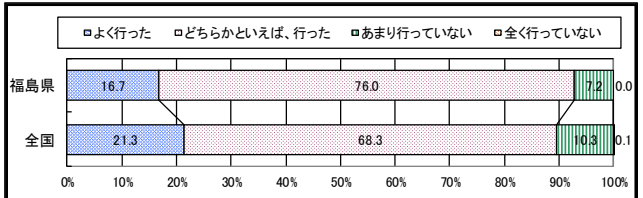


- 調査学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか 【学校質問紙】

小学校

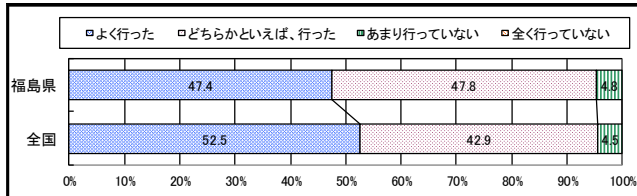


中学校

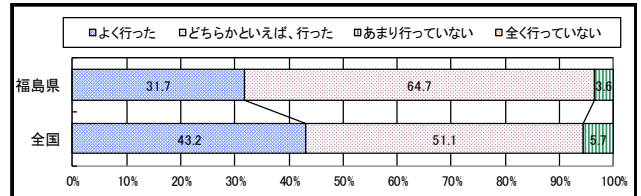


- 調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れましたか 【学校質問紙】

小学校



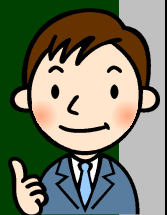
中学校



- 「主体的・対話的で深い学び」を実感している児童生徒の割合は、おおむね全国平均である。「主体的・対話的で深い学び」を実感している児童生徒ほど、学力が高い傾向がある。
- 習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法については「よく行った」と回答する割合は、小学校、中学校ともに全国平均を下回っているものの、肯定的回答が全国平均を上回っている。小学校では、前年度と比較すると、改善の傾向がうかがえる。
- 学習を振り返る活動について、「よく行った」と回答する割合が、小学校、中学校ともに全国平均を下回っている。経年推移を見ると、小学校では肯定的回答の割合が減少傾向である。

今後に向けたPoint!

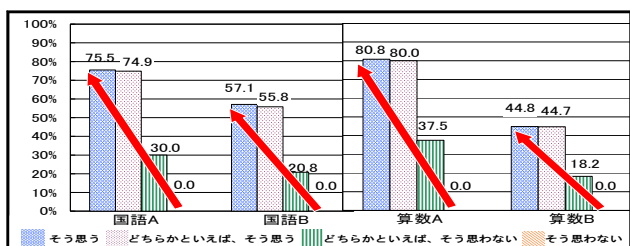
- ふくしまの「授業スタンダード」を活用し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を今後も推し進めていきましょう。
- 習得・活用及び探究の学習過程を見通した単元づくり、授業づくりを行うことが、児童生徒に生きて働く知識・技能とそれらを活用する力を育成することにつながります。
- 「振り返り」が学びを深め、「学びに向かう力」を育成します。1単位時間の進行管理を確実にし、児童生徒に学習内容や学習方法などの学びを実感させていきましょう。



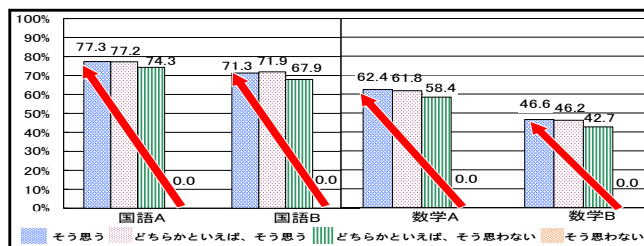
教員相互の学び合いに基づく校内研修の活性化

- 学校全体の学力傾向や課題について、全職員の間で共有していますか 【学校質問紙】

小学校 クロス集計(児童が回答した選択肢別正答率)

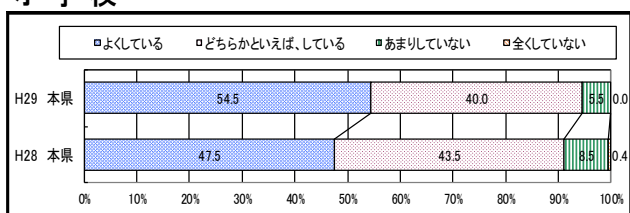


中学校 クロス集計(生徒が回答した選択肢別正答率)

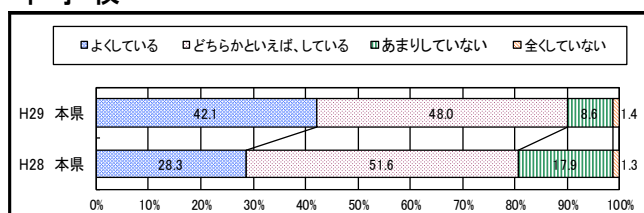


- 模擬授業や事例研究など、実践的な研修を行っていますか 【学校質問紙】

小学校

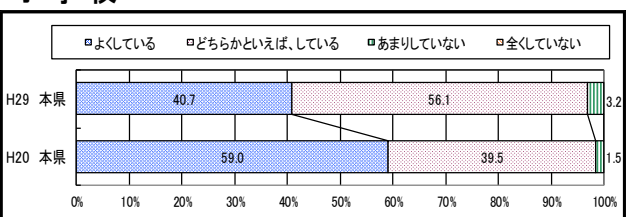


中学校

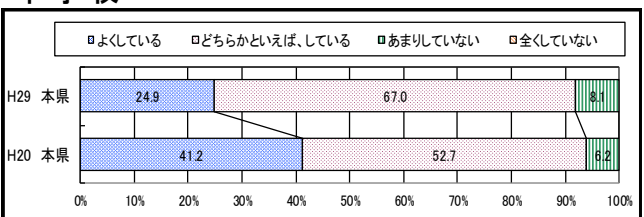


- 学習指導と学習評価の計画の作成に当たっては、教員同士が協力し合っていますか 【学校質問紙】

小学校



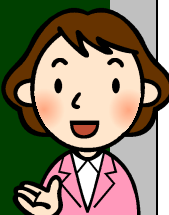
中学校



- 学校全体の学力傾向や課題について、全職員の間で共有している学校ほど、児童生徒の学力が高い傾向がある。
- 模擬授業や事例研究などの実践的な研修の実施について「よくしている」と回答する割合は、前年度の結果と比較すると、小学校で7.0ポイント、中学校13.8ポイント上昇した。校内研修が、教員にとってのアクティブ・ラーニングの場となってきている。
- 学習指導と学習評価計画の作成における教員間の協働性について、「よくしている」と回答する割合が中学校で特に低い。平成20年度からの経年推移を見ると、小学校、中学校ともに減少傾向が見られる。

今後に向けたPoint!

- 全国学力・学習状況調査の分析結果から成果や課題を校内の全職員間で共有したり、小学校、中学校間で共有したりして、同僚性・協働性を発揮した校内研修の充実に努めましょう。
- 模擬授業は、授業の事前検討としても大変有効です。子ども役になることで学習者の視点から授業を分析することができますし、学年や教科の枠を越えて学び合うこともできます。
- 児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にし、同僚性・協働性を発揮して学習指導と学習評価の計画を作成することは、授業づくりや授業改善の基盤となります。P(計画)-D(実行)-C(評価)-A(改善)のサイクルを効果的・効率的に機能させることが大切です。



5 ぶくしまの「授業スタンダード」を活用した授業の充実

今後の授業改善の方策の視点として、国語科では身に付けた力を言語活動を通して育成する授業のポイントを、算数・数学科では学習過程の「解決の見通し」や「まとめ・振り返り」のポイントを示しました。

小学校国語

<授業改善の方策> 「学級全体での話し合い」を生かし、「整理して書く」力を付ける

〈現状及び授業改善の必要性〉

文章から必要な情報(内容)を取り出し、それ(ら)を指定された字数内で整理して書く力が求められている。全国学力・学習状況調査においてもこの力を見る出題が続いているが、半数以上の児童が書くことができていない。他教科や総合的な学習の時間にも必要な力であり、国語科の授業において責任をもって身に付けさせたい。

- H29 ……な理由を【アドバイス】から二つとりあげて書くこと。(30～60字) [正答率32.2%]
- H28 【資料2】から取り上げて書くこと。(40～60字) [正答率54.6%]
- H27 ……取り出し、その言葉と(略)の内容を合わせて、一文で書くこと。(40～70字) [正答率34.0%]
……については、【文章】の□□の中で説明している(略)ことを取り上げて書くこと。(80～100字) [正答率39.7%]
- H26 ……の両方の内容を使って書くこと。(100～120字) [正答率27.5%]



〈授業における課題〉

- 検討・推敲する時間を十分に確保しておらず、適切な文を最後まで書く経験をさせていない。
- 整理して書く学習活動自体があまり行われていない。

物語文の指導で、字数を制限して人物像を多面的に書かせたり、どの授業でも、二つ以上のことを一文でまとめて書かせたりするなど、根気強く取り組んでいくことが大切です。

〈授業改善のためのポイント〉

- 1 必要な情報(内容)を取り出し、限られた字数で文章を整理する必要がある言語活動(説明文をリーフレットや新聞にまとめる言語活動等)を設定する。
- 2 一人で整理して書く時間を確保する。**個での追究・解決**
- 3 例文を基によさや改善点を出し合う活動を通して、学級全体で改善の方向性やポイントを確認する。**学級全体での話し合い**
 - 検討事項→何を残し、何を改め、何を付け加えるか。
 - 指導事項→文と文とのつなげ方、文末表現等
- 4 3を基にして推敲する時間を確保し、適切に表現されたものを書かせる。

小学校算数

<授業改善の方策> 主体的・対話的で深い学びを実感する「まとめ・振り返り」

〈課題〉

- 授業者の想定よりも自力解決や話し合いに時間がかかってしまい、適用・習熟に十分な時間をかけることができないことがある。
- 授業者が一方的に教科書の文章をそのまま使ってまとめをし、結果の共有になってしまうことがある。
- 自分の学びの変容を意識できない学習感想になってしまうことがある。

「まとめ・振り返り」でも思考を深める「問い返し」が効果的です。

- 【事実】「どういことですか」
- 【方法】「どのように考えたのですか」
- 【理由】「どうしてそうなるのですか」

〈目指したい「まとめ・振り返り」〉

- ★ 「何を学習したか」をまとめ、「どのように学習してきたか」を振り返る。
- ★ 対話を通して、自分の成長や変容、友達のよさや集団で学ぶよさに気付くことができるようにする。

〈授業改善のためのポイント〉

- ノートや板書を用いて思考過程を振り返らせるとともに、新たな問いを引き出すようにする。
- 単元の中でその時間の位置付けを考慮し、意図的に音声言語や文字言語で自分なりに表現させる。
- 子ども自身に「何ができるようになったか」を実感させるため、これまで同様、適用問題に取り組ませる。その際、ねらいに合った適用問題にするなどの工夫をする。

「問い返し」により思考が深まったときこそ、共有させるための教師の働きかけ(再生)が効果的です。

【再生】「〇さんの説明をもう一度言えますか」

「授業スタンダード」P5. 6をご覧ください。

<授業改善の方策> 主体的・対話的で深い学びを実現するため、対話によって自分の考えを広げたり深めたりする場面を、発問を吟味して設定すること

<課題>

ペアやグループでの話し合いの場面があっても、話し合うための課題と発問が具体性に欠けるため、話し合いが深まらなかったり、根拠と理由を結び付けて自分の考えをもつことができていない。

<授業改善のためのポイント>

生徒が考える場面と教師が教える場面を明確にし、生徒が考える場面では発問を吟味することがポイントである。
例えば、本論にある具体例の役割について考えさせる授業では、「三つの例があることでどのような効果があるのだろうか、結論との関係から考えをまとめよう。」など、考える視点を明確にした発問をすることが大切である。

本論の三つの例が結論部分のどこと関連していて、どのような効果があるか説明する授業

<課題>

どうして三つの例が必要だったのだろう。



この課題のままでは書けないので「どんな効果」「結論との関係」について考えさせる発問が必要です。



調査問題では、「表現の仕方や構成の効果について、根拠を明確にして自分の考えを書く」ことが出題されています。「工夫」と「効果」という言葉を用いながら交流することで、考えの広がり、深まりが期待できるようになります。発問とともに参考にしたい学習活動です。



<授業改善の方策> 主体的・対話的で深い学びを実現するため、解決の見通しをしっかりとらせること

<授業における課題>

自力解決の時間は確保されているが、生徒一人一人が解決の見通しをもっていないため、追究意欲が低下している生徒が多く、その後、ペアやグループで話し合いをさせても、主体的・対話的で深い学びが実現できていない。

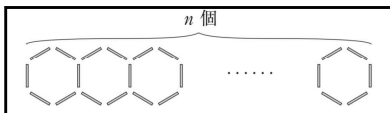
<授業改善のためのポイント>

自力解決の前に、解決方法の見通しをしっかりとらせることがポイントである。
例えば、数の性質を証明する授業では、目的に応じて式を変形させるために、どのような式に変形すればよいのかを生徒一人一人に理解させたり、図形の証明では、証明の方針を立てる段階を位置付けたりすることが大切である。

ストローで六角形をつくり、六角形をn個並べたときに必要なストローの本数の求め方を説明する授業

<課題>

六角形をn個並べたときに必要なストローの本数の求め方はどのように説明すればよいか。



課題を設定した後、すぐに自力解決させようとしても、生徒はその方法が分からず・・・



ストローを図1のように囲むと、1つの囲みにストローが6本ある。その囲みがn個あるので、この囲みで数えたストローの本数は6n本になる。このとき、2回数えているストローが□本あるので、必要なストローの本数は6n本より□本少ない。
したがって、六角形をn個つくるのに必要なストローの本数を表す式は、 $6n - (\square)$ になる。

調査問題では、上に示したように与えられた説明の筋道を読み取り、事象を数学的に表現する問題が設定されています。授業でも、このような学習を取り入れることで、生徒は説明の方法を知り、以後の学習で、必要なストローの本数を表す式とその理由を、見通しをもって説明することができるようになります。

生徒に解決の見通しをもたせることで、証明問題も含め、数学的に説明する活動にも主体的に取り組むことができるようになります。

「授業スタンダード」P4に掲載されている「<計画・方向付け・見通し>追究・解決への手掛かりを見つけさせるために」や調査問題にもヒントが隠されていますから、参考にしましょう。

6 教員相互の学び合いが生まれる学校の実践事例

小学校における「教科担任制」による授業改善

教師の専門性や得意分野などを生かした「教科担任制」

【A小学校】

この学校では、学級担任の先生の専門性や得意分野が十分に生かせるよう、同学年の他の学級でも得意教科を担当できるように時間割を工夫し、「教科担任制」を実施しています。

「教科担任制」って何?

「教科担任制」は、教科ごとに教員の専門性や得意分野などを生かして授業を行うものです。

なぜ、「教科担任制」なの?

先生方には、持っている専門性や得意分野を生かして、子どもたちにとって、楽しく、おもしろい授業を実践してほしいのです。そして、先生方にも授業をもっと楽しんでほしいのです。そうすれば、子どもたちの学ぶ意欲が向上し、必ず学力向上につながると考えています。



【A小学校の校長先生】

「教科担任制」を進めるポイントとは?

- 先生方の専門性や得意分野、研究教科等の把握
- より質の高い授業実践
- 授業の進め方やノート指導等の温度差のない統一した指導の実現
- 時間割の組み方の工夫

どのように取り組んでいるの?

A小学校の取組例

| | 5年1組 | 5年2組 |
|------------------|----------|------|
| 5年1組担任 (国語専門) | 国語の授業を担当 | |
| 5年2組担任 (算数専門) | 算数の授業を担当 | |



【英語が堪能な先生】



【音楽専門の先生】



【理科専門の先生】

【B小学校】

この学校では、算数を専門とする教師の力を十分に発揮できるよう、各学級の算数の授業ではT1として、学級担任はT2としてTT指導を行っています。

B小学校の取組例

どのように取り組んでいるの?

| | 6年1組 | 6年2組 | 6年3組 |
|----|---------|------|------|
| T1 | 算数専門の教師 | | |
| T2 | 1組担任 | 2組担任 | 3組担任 |

- 毎時間TTで実施
- 3学級でT1が同じであるため統一した指導が可能



どのような成果があるの?



【打合せは、放課後に教室で行う】

算数を専門に担当するので、教材研究や授業準備の時間を十分に確保できます。

「この子の考えをぜひ紹介したい!」子どもの考えなどを積極的に取り上げられるよう見取っています。



【算数専門の教師】

学年の子どもの様子が分かるので、間違いの傾向などを授業に生かすようにしています。

学級担任だからこそできることをTTの授業で行っていきたいですね。



【学級担任】

中学校における「タテ持ち」による授業改善

「タテ持ち」を成功させる「教科部会」の定期的開催

～「タテ持ち」のねらいは、「教師の学び合いの促進」と「話し合いによる授業の質的改善」～

【C中学校】

数学3名で「タテ持ち」を行っているC中学校では、教科部会を時間割に位置付けられなかったため、放課後、定期的に教科部会を開催しようとしています。

「タテ持ち」って何?

一人の教員が複数の学年を担当する指導体制のことです。教師間で指導方法を共有し、協働して担当教科の授業づくりを行うことを重視するものです。



【C中学校の校長先生】

「タテ持ち」のポイントとは?

一言でいえば…、それは「教科を担当する教員同士の学び合い」です。教科部会を定期的で開催し、指導方法や教材についての共通理解を図ること、授業についての悩みなどを相談し合って、よりよい授業づくりを進めることなどが大切です。これが互いの授業の質を向上させ、さらには若い先生方を育てる環境になるのです。

教科部会をどのように開催しようとしているの?

時間割に組み込めればよいのですが、なかなかできません。そこでまず、2学期からは、毎週水曜日を「ノー部活動デー」にしようと考えています。そして、教科部会を開催する時間を設定しようと思います。



どのような取組例があるの?

C中学校の取組例

- A、B、Cの3人の話し合いによる質の高い授業実践
- より系統性を意識した指導の充実

| | | | |
|------|------|------|------|
| 1年1組 | 1年2組 | 1年3組 | 1年4組 |
| 2年1組 | 2年2組 | 2年3組 | 2年4組 |
| 3年1組 | 3年2組 | 3年3組 | 3年4組 |
| A先生 | B先生 | C先生 | |

【教科部会での主な内容】

- 生徒に関する情報交換
- 授業進捗の把握と今後の予定
- 教材に関する話し合い
- 授業アイデアの共有 など
- ※ その他、定期テスト問題検討や評価についての共通理解、補充のための体制づくりなどが考えられます。教科指導における互いの悩みを解消する場にしたものです。

「互見授業」を基盤とした校内研修の日常化

ポイントを絞って参観し合う「互見授業」の実践例

～「授業スタンダード」を活用した「私の授業のここを観てほしい!」～

【D小学校】

小規模校であるD小学校では、なかなか互いの授業を見合うことができませんでした。そこで、指導略案で部分的にでも参観してほしいところを枠で囲み、短時間(5分～15分程度)に参観できる仕組みを、日常的に取り入れています。

K先生の悩み



【K先生】

私は、授業スタンダードの「学級全体での話し合い」にある「コーディネート」がもっとできるようになりたいと思っていますが、どうしても私が話し過ぎてしまい…。

研修主任や他の先生方との授業づくり



【研修主任】

授業スタンダードの「共有させる働きかけの例」や「考えを深める問い返しの例」を参考にしてみるといいですよ。

K先生の略案と同じ授業を、明日行うので見に来てください。一緒に考えてみましょう。

ここを参観してほしい!



【学年主任】

互見授業

【授業後】

- 学習指導案
- 1 問題把握
- 2 自力解決
- 3 集団解決
- 4 まとめ
- 5 適用問題

研修主任：問い返しができていましたね。さらに、ねらい達成に向けて問い返しができるといいですね。

学年主任：K先生自身しゃべり過ぎず、子どもに言わせようとする姿勢が見えましたよ。

K先生：何かつかめてきたように思います。明日は、別な教科でもコーディネートを意識して授業をしますので、「集団解決の場面」だけでも参観してください。

7 7 ふくしまの強みを生かし、課題の克服を目指して!



「頑張る学校応援プラン」 ～ふくしまの挑戦と戦略～



児童生徒質問紙調査では、「前学年の時に受けた授業では、自分たちで課題を立てて、話し合い発表するなどの学習活動に取り組んでいたと思いますか」という質問に対し、肯定的な回答が全国平均を上回るなど、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて取り組んでいる学校が数多く見られます。今後も、「ふくしまの『授業スタンダード』」を有効に活用し、多くの教室で「主体的・対話的で深い学び」の実現を図って下さい。

各学校では、「学力向上グランドデザイン」を策定し、「全国学力・学習状況調査」と「福島県学力調査」を活用したロングスパンのPDCAサイクルと、「定着確認シート」を活用したショートスパンのPDCAサイクルを確立していることと思います。この2つのサイクルを、全校体制で、着実に実行していくことが大切です。

学校質問紙調査では、授業研究を年間11回以上実施している学校の割合が、全国平均を上回っており、本県の小・中学校が、校内研修に熱心に取り組んでいることが分かります。一方、「講師の招聘」や「実践的な研修」、「学校課題の共有」に関する項目では全国平均を下回るなど課題も見られます。複雑化・多様化する学力向上の課題に対し、外部の助言に耳を傾けながら、協働的に学び合う研修体制づくりが求められています。

1 「2つのPDCAサイクル」の、
全校体制での着実な実行

2 「主体的・対話的で深い学び」
の実現に向けた授業改善

3 課題を共有し、教科や学年の
枠を超えて学び合う体制づくり

『学力向上に責任を果たす』 5つのポイント



4 中学校区でのより緊密な連携

5 家庭・地域との連携と
家庭学習の充実

各学校で

プラスワンアクション!

これまでも本県では、多くの市町村において、小・中連携を推進してきました。その結果、学校質問紙調査の「小・中合同での授業研究」の項目では、全国平均を上回っています。一方、「教育目標を共有する取組」「教育課程に関する共通の取組」は全国平均を下回る結果となりました。同じ校区の小・中学校が目標を共有し、9年間を見通した取組を強化することで、小学校で培った力が、中学校で十分に発揮されるようになります。

児童生徒質問紙調査では、今回も「平日や休日に、授業時間以外に1時間以上学習している」児童生徒の割合や、「予習している」「復習している」児童生徒の割合が、全国平均を上回りました。福島県の子供たちは家庭学習に一生懸命取り組んでいます。こうした基盤の上に立って、これからの時代を生きる子ども達に必要な家庭学習の在り方について家庭や地域と共有し、家庭学習の質的な向上を図っていくことが大切です。